

国際交流やものづくり教育を通して 日本の魅力、鉄の魅力を伝える

鉄づくりのスケールの大きさと奥深さを伝える 教員民間企業研修—名古屋製鉄所、室蘭製鉄所

「教員民間企業研修」は、(財)経済広報センターが「経済界と教育界のコミュニケーションの促進」を図るために毎夏実施しているもので、全国の教員の皆さんに、民間企業での研修を通じて企業の人材育成や経営方針などについて理解を深め、その体験を子どもたちの教育に活かしていただくことを目的としている。

新日鉄では毎年「教員民間企業研修」を通じて、教員の皆さんにもものづくりの大切さや当社の持つ技術力、環境保全や人材育成の取り組みを紹介している。今回は2008年8月に、

2製鉄所合計16名を迎えて実施し、2日間のカリキュラムで当社概要・さまざまな取り組みの紹介と、工場見学を行った。参加した教員の皆さんからは、実際の工場の迫力に「百聞は一見にしかず」といった感想や、誇り高く仕事に取り組む社員の姿が印象的との声をいただいた。

また、室蘭製鉄所研修に参加した教員の引率で、2008年10月に、地域の小学校の児童が製鉄所見学に訪れるなど、本研修が広がりを見せている。当社では、今後も地域の自治体・学校との連携を深めて、「ものづくり教育」を進めていく。

名古屋



連続鋳造設備を見学。間近で感じる熱と迫力に驚きの声が上がった



熱延コイルの大きさを実感

熱延ライン見学

素材産業があつてこそその現代社会だと実感

南知多町立内海小学校教諭 山下 理恵先生

コンピュータで管理された生産システム、環境へのきめ細かな配慮など、最先端の大企業の企業努力について学ぶことができました。大変有意義な研修でした。

特に、『大地の子』を読んで以来、念願だった高炉見学ができ、日本の発展を支えてきた製鉄業の存在意義を実感しました。素材産業があつてこそその現代社会だと思いました。

今後教室の子どもたちに、鉄の魅力やその重要性を伝えるようにしていきたいと思いました。

室蘭



第一鉄鋼(株)で行われた火花試験体験学習



ニッテツ室蘭エンジニアリング(株)の工場見学



ニッテツ北海道制御システム(株)で、走査型温度計での測定を見学

自分や会社を高めていこうとする意識の高さに感心

苫小牧市立苫小牧東中学校教諭 本波 拓二先生

ものづくりに対する真摯な取り組みだけではなく、技能を伝え、改善していくための人材育成や、さまざまな研修やOJTを通し常に自分や会社を高めていこうという社員の意識の高さに学ぶことが数多くありました。

また、プラスチックリサイクル施設を見学し、新日鉄がものづくりだけではなく、その特性を活かして環境問題に取り組んでいることや、プラスチックリサイクルが抱える現代社会の問題を知ることができて、大変勉強になりました。

新日鉄では、次世代を担う子どもたちや学生、その教育を担う教員の皆さんに対し、当社のさまざまな活動やものづくりの大切さを理解していただく取り組みを行っている。また、海外でも当社海外事務所やグループ会社において、現地の日本商工会議所などを通じた社会貢献活動や、独自に日本とその文化を紹介する活動を展開している。今号では、2008年夏に製鉄所で行われた「教員民間企業研修」や川崎市の中学生に向けた「エネルギー環境ワークショップ」、中国の学生たちと当社グループ社員の交流について紹介する。

■ 中学校で「エネルギー環境ワークショップ」を開催

2008年12月19日、神奈川県川崎市立柞形中学校で「エネルギー環境ワークショップ」が開催された。

当社は、環境部とエネルギー・プロセス研究開発部の社員が講師となり、1年生から3年生まで計30名の生徒に、体験的な学習やディスカッションを通じて環境問題への関心を高めてもらい、持続可能な社会の実現に向けたさまざまな取り組みについて学習してもらうワークショップを行った。

ワークショップのテーマは「使用済みプラスチックのリサイクルで燃料電池車を走らせよう」。最初に製鉄プロセスをDVDで放映し、身近な鉄製品や現代社会での鉄の重要性を紹介し、鉄の原料・作り方とCO₂の発生との関係について説明した。次に当社の製鉄所で取り組んでいる廃プラスチックリサイクルについて紹介。製鉄プロセスを利用する、CO₂を発生しない熱分解により地球温暖化防止に貢

献し、またその工程で水素が得られることを説明した。その後の実験では、生徒が実際に水素ポンベを使って燃料電池車を走らせた。

参加した生徒は真剣に実験を見守り、プラスチックリサイクルの仕組みを肌で感じる絶好の機会となった。



■ 広州で日中交流サロン — 広州太平洋馬口鉄有限公司

広州市内のカフェで日本語を勉強する大学生と広州市内で働く日本人がお互いの文化や関心事を語り合う「日中交流サロン」。中国でブリキの製造、販売を行っている新日鉄グループの広州太平洋馬口鉄有限公司（PATIN）総経

理の板垣毅（新日鉄より派遣）と広州総領事館文化交流担当（当時）の米田麻衣氏が発起メンバーとなり、2007年12月からスタートしたこの取り組みは、交流する大学を変えながら月1回開催されている。



日本人と中国人学生が歓談する様子。参加した日本人が自分の話せる題材をいくつか提示し、その中から学生に選んでもらう。最後の30分では、日本人学校の先生方の指導により、毎回1曲日本の歌を歌う



2008年11月は広州市天河区にあるカフェ「南北東西」で行われた（前列左が板垣毅）

広州太平洋馬口鉄有限公司(PATIN) 総経理 板垣 毅

日中交流サロンは、日中友好を目的に、現地で働く日本人だからこその社会貢献活動として、地道に取り組んでいます。普段実際に日本人と会話する機会の少ない日本語学科の学生に「生の」日本人と接する機会を提供するとともに、広州市内で働く中国語が話せない日本人にとっても、現地の学生がどのようなことを考えているのかを知るきっかけ作りともなっ

ています。

一度参加した学生からは大変好評で、もっと時間を長くしてほしい、回数を増やしてほしい、次回もまた参加したい、一緒にイベントをやりたいなどの意見が多く聞かれます。本活動を通じ、より日本を好きになってくれる中国人学生が増えることを願っています。

■ 中国人大学生がホームステイ体験—北京事務所／中国日本商会

中国に進出している日本企業で組織される中国日本商会（当社北京事務所長の小谷勝彦が副会長を務める）が2007年5月に始めた社会事業「走近日企・感受日本」（日本企業に触れ、日本を感じよう）は、中国人大学生に、日本の姿を自分の目で見て日本への理解を深めてもらうことを目的としたもの。大学生を日本に招き、同会会員企業の工場や

研究所・研修施設の見学、地方視察、大学訪問、会員企業の社員宅でのホームステイを実施している。

2008年に2回行われた当社社員宅でのホームステイでは、温かい交流により、日中の相互理解の一步となる貴重な体験となった。



左から2人目が李婷さん

● ホームステイ体験学生

—— 李婷さん（清華大学材料系2年）

● ホームステイ受け入れ

—— 広畑製鉄所総務部経理グループ 後藤 弘毅

2008年5月31日と6月1日、わが家へホームステイしたのは、清華大学材料系2年の李婷さん。宮崎駿をはじめ日本の漫画・アニメの大ファンだということで、話し始めてすぐに打ち解けました。中国と日本、世代も違う人間同士で「ドラえもん知ってる？」という会話が信頼関係へのステップとなりました。

中国へのお土産に漫画を買って帰りたいとの彼女の希望で、1日目は新宿の本屋や自宅近くの古本屋でお気に入りの漫画本探しに奔走。2日目は家族（妻、息子）と、江戸時代の文物を中心に近現代までの日本の文化・風俗を紹介している両国の江戸東京博物館を見学しました。「日本には中国で既に失われた伝統的な服装・文化である和服や茶道が生活に根付いている。こうした文化の伝承は中国も日本に学ぶべきだ」と話す彼女の言葉が印象的でした。1泊2日の非常に短い時間でしたが、日本人の素朴な生活ぶりを知ってもらうだけでなく、中国大学生の純粋さを私たちも知ることができ、貴重な経験となりました。



右が陳龍飛さん

● ホームステイ体験学生

—— 陳龍飛さん（中央财经大学金融学院金融工程3年）

● ホームステイ受け入れ

—— 薄板営業部住宅建材開発グループリーダー 宮崎 哲夫

2008年11月29～30日、陳龍飛さんがわが家へホームステイしました。北京生まれの北京育ち。辰年生まれにちなみ、お父さんが付けた男の子の名前の通り、強い意志と力で世界に羽ばたこうと日々自分を磨いているお嬢さんで、中学生のころから学んでいる日本語はとても流暢でした。日本のことが好きで、金融・企業・政治から芸能界のことまで、日本について、私たちよりもいろいろ知っていることに驚きました。でも、ジャニーズのタレントの話で盛り上がる時の瞳の輝きは、やはり20歳の女の子だと感じました。

彼女の希望で1日目は東京大学や慶応大学を見学した後、皇居や原宿の竹下通り、浅草を散策しました。また次女のテニスの練習に付き合ってもらい、2日目は千葉県の九十九里浜をドライブして、白子町で行われた次女と三女のテニスの試合も応援してくれました。家族全員貴重な体験をできましたが、特に、世代の近い娘たちには大きな刺激になったと思います。

新日鉄北京事務所／新日鉄鉄鋼情報コンサルティング(北京) 有限公司マネジャー 扇 常夫

中国日本商会による社会事業「走近日企・感受日本」は、すでに4回の訪日団を出していますが、私も準備段階から本事業に事務方として参画しています。

新日鉄は第一回訪日団の君津製鉄所訪問を受け入れ、その時の写真が人民日報の日中友好特集で取り上げられるなど、この活動は当地でも評価されていると感じています。また、大学生は日本でホームステイを体験していますが、新日鉄は

毎回、社員宅で受け入れ、日中交流の一端を担っています。

本訪日団は、年2回、1回30人の派遣と限りはあるものの、5年間継続する予定であり、一人でも多くの中国人大学生に日本をじかに感じ取ってもらいたいと願っています。

